実践研究

発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと感性的表現力の向上の取り組み
― 3歳児への第1回目、第2回目の指導と考察 ―

長　川　　慶
岐阜聖徳学園大学短期大学部

Efforts to Improve Competence and Emotional Expressiveness in Preschool Children's Presentation Activities through Singing Instruction: The First and Second Research Study for 3-year-old Children and a Subsequent Analysis

Kei NAGAKAWA

キーワード：幼児　発声　歌唱指導　頭声　領域「表現」

Ⅰ．はじめに

幼児教育において、歌唱活動は非常に重要である。幼児教育における歌唱活動は、単に歌唱を通じて感性を陶冶するだけでなく、歌詞を通じて言葉を覚える、楽曲を通じて季節感を味わう、一緒に歌うことを通じて社会性を身につけるなど、他の領域とも密接に結びついている。ゆえに保育現場での歌唱活動は、領域「表現」だけではなく幼児教育全般に関わり、その根幹をなしている活動と言えるだろう。

しかし、筆者が行ってきたフィールドワークを通じて、保育現場での歌唱活動では、ともするとどなり声での歌唱に陥りやすいことがわかり、これまでの研究で、どなり声での歌唱の問題点と改善の必要性を指摘してきた[1)]。子どもたちのどなり声での歌唱は、集団での歌唱、子どもたちの心理、保育者の指導など、複合的な要因で引き起こされる。しかし、研究から見えた根本的な原因は、基準となる発声法や指導法が確立されていないことである[1)]。フィールドワークでは、多くの保育者から「歌唱指導の方法がわかない」、「子どもがどなって歌うが、どう指導したらよいのか、わからない」など、切実な声が多く寄せられた。これらの保育者の声は、拠り所となる歌唱（発声）指導法が存在しないために、音楽の専門家ではない保育者が、問題意識を抱えながらも適切な指導を行うことができていない実情を反映しているものと認識している。さらに言えば、基準となる発声指導法が存在しないことは、幼児期の子どもにどのような歌声を求めるのか、どのような歌声を「子どもらしい」と捉えるかなど、歌唱活動に関わる全ての判断が、個々の保育者に委ねられることになる。これは、保育者や保育施設により歌唱活動の内容に差が生じることにつながり、保育の質保証の面で大きな問題であると言えよう。よって、保育現場で実用的に使用できる発声指導法を整備することは、喫緊の課題と考えるのである。

そこで、現場の保育者が実用できる歌唱指導メソッドの開発を目的に、2019年よりプロジェクトをスタートさせ、現在も継続中である。本研究では、研究者（筆者）が幼稚園に出向き、直接子どもたちを継続的に指導することを通じて、保育現場でより汎用性の高い歌唱指導法を構築することを目指している。

本稿では、歌唱指導法の体系化の一助として、３歳児の第１回目、第２回目の２回の指導について考察する。本プロジェクトの実施まで、筆者は幼児に対する音楽指導の経験がなかった。よって、３歳児への第１回目、第２回目の指導については、３歳児の実態・実情を知る機会として位置づけた。本稿ではその中でも、歌唱指導法を構築するうえで重要となる以下の項目について検討する。

Ａ．３歳児は音楽を聴き分けて、反応できるのか
Ｂ．３歳児はファルセット（裏声）が出せるのか
Ｃ．３歳児はファルセット（裏声）で歌唱できるのか

Ⅱ．指導計画

１．指導の概要

指導は、岐阜市内の２つの私立幼稚園で実施した。なお、当該の幼稚園は２園とも、筆者が指導に入るまで、外部講師等の音楽の専門家による指導はおこなっていなかった。

（１）Ａ幼稚園
実施日　第１回目：2019 年５月 27 日　第２回目：2019 年７月 10 日
実施方法：学年全体への一斉指導
指導対象者：年少（３歳）児

（２）Ｂ幼稚園
実施日　第１回目：2019 年６月 27 日　第２回目：2019 年７月 16 日
実施方法：クラス毎の指導（年少３クラス×３回）
指導対象者：年少（３歳）児

なお、Ｂ幼稚園では、年少クラスとあわせて２歳児（次年度に年少クラスに入る子ども）のクラスでも指導を行ったが、本稿では、年少クラスに対象を絞り考察することとする。

２．指導計画

１．本時のねらい

- 第１回目：リズムや音に即時反応できる
- 第２回目：リズムや音の高さから動物の動きを想像する。動物の鳴き声を真似し、さまざまな声を出す

上記のねらいは、第１回目の活動で「３歳児がどの程度、音や音楽を聴き分けて反応できるのか」、第２回目で「３歳児は遊びの中で裏声を出し、それを歌唱につなげられるか」を検証するために設定した。

本研究の特徴は、発声法として、裏声（ファルセット）主体の頭声発声を採用することにある。頭声発声を採用する理由やその利点については、すでに筆者の拙稿の中で言及している[2)]ので割愛するが、本研究において「裏声（ファルセット）で歌う」ことは、発声指導法の構築の礎となるものである。よって、研究の第一到達目標は「幼児が裏声（ファルセット）を自在に出せる」と設定している。本研究の計画に際しては、フィールドワークや基礎研究から、発声指導（実際に裏声で歌うこと）は４歳児から開始することとし、３歳児については、リトミックを参考にした音楽活動を行い、基礎的な音楽や表現をする力を養うと同時に、まずは思いのままに声を出し、歌うことに親しみ、歌唱を愛好する心情を育てる期間と定めた。しかし一方で、フィールドワークなどを通じて、３歳児が時に裏声を出しながら遊んでいる姿を目にし、３歳児にも裏声による歌唱が可能であるのか、見極める必要性も感じていた。また、当初の計画通り、３歳児への指導を「歌や音楽に親しむ期間」とするのであれば、どのような活動を実施できるのかも考える必要があったため、今後の研究方針を固める意味も含めて上記のねらいを設定した。

２．指導手順

指導の手順は、表１、表２の指導案の通りである。考察の章で詳述するが、Ａ幼稚園の第１回目の指導では、子どもたちの様子から、表１の☆印の後に、全員で円になり音楽に合わせて歩く活動を行った。さらに、それに加えて音楽を途中でランダムに止め、音楽が止まったら歩くのをやめて立ち止まる、音楽が再開したらまた歩き出すという活動（以下、ストップ・アンド・ゴーと表記）も付け加えた。また、「音楽に合わせて指示された部分に触れる」については、ストップ・アンド・ゴーとあわせて行い、音楽を止めるのと同時に「お腹」「頭」など身体の部位を保育者（筆者）が指示し、子どもたちは指示された部位を触る活動に変更した。また、表１★印「好きな動物は何か子どもたちに尋ねる」については、子

表１　３歳児指導案　第１回目（Ａ幼稚園、Ｂ幼稚園共通）

内容	リズムや音楽に身体の動き合わせることを楽しむ	ねらい	リズムや音に即時に反応できる

子どもの活動	保育者の援助・留意点
● リズムに合わせて、指示された身体の部分を触る	● 保育者をまねるように指示する
● 身体だけでなく、指示された身の回りのいろいろな所に触れる	● 慣れてきたら身体だけではなく、空（両手を上にあげてジャンプする）、床（かがんで床を触る）も入れる
● 注意深く指示を聞いて、正しい部分に触れる	● おおよそ全員がリズムに合わせてできるようになったら、言葉と触る身体の部分をわざと変える。 ● 変える前に、“先生が言った”部分を触ることを再度確認する”
● ☆音楽に合わせて指示された部分に触れる	● ☆最後に音楽に合わせて、指示された部分を触るように指示する。
● ★好きな動物を思い出す	● ★好きな動物は何か子どもたちに尋ねる ● 答えを聞いて、保育者が動物を何種類か選ぶ（鳴き真似が簡単にできそうな動物を中心に選ぶ） ● どんな動きや、鳴き声かも尋ねる ● “先生が曲の途中に動物の名前を言ったら、その動物になってね”と伝える
● 音楽に合わせて動物の真似もしながら活動する	● 音楽に合わせて動物の真似も入れた活動を行う

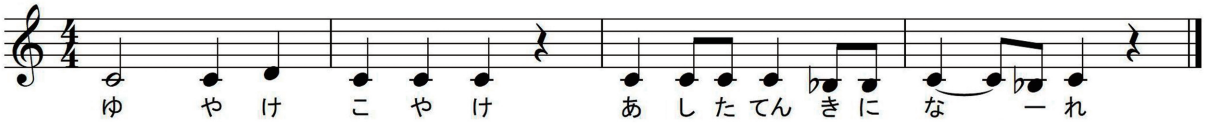
どもの活動の様子から難易度を下げ、さまざまな動物を思い浮かべることはせず、猫の真似のみ取り入れることとした。これは、導入で行った手遊び「はじまるよ」（作詞者・作曲者不詳）に猫の真似が入っており、活動の流れから、子どもたちがよりスムーズに模倣ができると考えたためである。なお、後日実施したＢ幼稚園での第１回目の活動でも、Ａ幼稚園と同様に実施した。

第２回目の指導は、Ａ幼稚園では表２の指導案の通り実施したが、時間の都合で表２◎印のわらべ歌の歌唱はおこなわず、裏声（ファルセット）で「さようなら」と挨拶することとした。一方、Ｂ幼稚園では予定通りわらべ歌「夕焼け小焼け」の歌唱を行った。また、Ａ幼稚園で、表２◇印の「動物になって動く」活動を実施した際に、四つん這いになる姿勢が多く、３歳児には適さないという意見が参観保育者から出された。このため、Ｂ幼稚園での活動では、教室の四隅に動物のイラストを置き、それぞれの動物の音楽を聴き分けて、その動物の鳴き真似だけをしながらイラストのほうに歩く（集まる）ことに変更した。

表２　３歳児指導案　第２回目（Ａ幼稚園、Ｂ幼稚園共通）

内容	リズムや音楽に動物の動きや鳴きまねを模倣する。	ねらい	リズムや音の高さから動物の動きを想像する。 動物の鳴き声を真似し、色々な声をだす。

子どもの活動	保育者の援助・留意点
● 大きな円になる	● 大きな円になるように指示する
● 音楽に合わせて動く	● 前回の活動を思い出し、音楽に合わせて歩き、音楽が止まったら立ち止まるように指示し、ピアノを弾く ● 今日は音楽に合わせて、動物の真似をすることを伝える
● 保育者の質問に答え、今日の活動で真似をする動物を確認する。	● 保育者が動物のカードを示し、何の動物か質問する（ゾウ、ゴリラ、猫、ネズミのイラストを用意する）
● 動物の動き、鳴き声を想像する	● それぞれの動物が、どんな動きや鳴き声かを聞く
● 動物の動き、鳴き声を真似する	● 保育者と一緒に、動物の動きや鳴き声を真似するように指示する
● ◇活動のルールを聞く	● ◇今日の活動のルールを説明する；音楽に合わせて、保育者が指示する動物になって（動物の動きを真似しながら）動き､音楽が止まったら、その動物の鳴き声の真似をする（歩く方向は円に沿う）
● 保育者の指示に従い練習を行う	● それぞれの動物のリズムや音域を示し、練習させる（動物は、猫、犬、ゴリラ、ゾウの４種類とし、同一のメロディーを、それぞれの動物に合わせて速度と音域を変化させ、音楽から動物を連想させる）
● 音楽に合わせて活動する	● 活動をスタートさせる
● わらべ歌を歌う	● “遊んでいたら、夕方になったよ”と言い、みんなで夕日に向かって歌おうと提案する。わらべ歌“夕焼け小焼け”（譜例１）を範唱する。
● ◎動物の鳴き声を真似しながら、わらべ歌（譜例１）を歌う	● ◎わらべ歌（譜例１）を、今日みんなでなった動物にもなって歌うように指示する



譜例１　夕焼け小焼け（わらべ歌）

Ⅲ．考察

以上の活動から、上述の３点についてそれぞれ考察を行う。

１．３歳児は音楽を聴き分けて、反応できるのか

結論としては、３歳児は音楽を聴き分けて、それに反応することは可能である。しかし、保育者の言葉のみで反応を促したり、選択肢が多数ある活動に対応したりすることは難しいこともわかった。よって、歌唱活動でも言えることであるが、同じ活動を何回も繰り返しながら、少しずつ子どもたちのできることを増やしていく姿勢が大切であると考える。

（１）リズムへの反応について

第１回目の指導では、最初に保育者（筆者）が手を２回たたくと同時に「肩」、「耳」、「頭」など身体の部位を言葉と動作で指示し、子どもたちが指示された部位を触る、という活動（リズム遊び）を行った。筆者は、子どもたちが慣れてきたら、リズムにのって連続して実施できるものと想定していた。しかし、子どもたちは身体の部位を耳で聞いて触るというより、筆者の動きを目で見て真似していたため、身体の部位を触るタイミングが常に一拍ずれていて、リズムにのって行うことはできなかった。これは、筆者がわざと言葉と異なる部位を触る（言葉で「頭」と指示しながら膝を触る）ようにするとさらに顕著になり、ほとんどの子どもたちが、筆者が言葉で指示した部位でなく、触った部位のほうに触れていた。筆者は、子どもたちがゲーム感覚で楽しくリズムを体感できるようにこのプログラムを組んだが、３歳児にとっては難易度がかなり高かったことを実感した。しかし一方で、参観保育者からのリフレクション（Ⅴ章参照）に見られるように、子どもたちにとってリズムの活動自体が全く面白くなかったというわけではなく、それなりに楽しんでいたという意見も多くあった。よって、最初は身体の触る部位を減らし、頭と足などなるべく遠い部位の指示からはじめるなどして難易度を下げれば、子どもたちにとって音楽的な感覚を養う活動（遊び）として成立させることができると考える。さらに、保育者を真似て身体の部位を触ることを繰り返すことで、子どもたちが身体の部位の言葉を覚えるという副次的な効果も期待でき、時間をかけて丁寧に行うことで、より複雑な展開も行うことができるのではないかと考える。いずれにしても、平易な活動から始め、バリエーションを増やしながら徐々に難易度を上げ、継続して指導を実施することが重要であると再認識できた。

（２）音楽に合わせた行進とストップ・アンド・ゴーについて

リズム遊びに比べ、行進とストップ・アンド・ゴーはスムーズに活動を行うことができた。特に、ストップ・アンド・ゴーでは、音楽を途中で止めるたびに子どもたちから笑い声があがり、３歳児でも十分に楽しめている様子がうかがえた。また、曲の速度を変化させると、筆者が説明をしなくても自然に音楽の速度に合わせて動く姿も見られ、音楽を聴きとり、それを身体的に表すことができることが確認できた。また、音楽を速い速度で演奏すると、子どもたちは歓声をあげて走り、とても楽しそうであった。この現象は指導を行った全てのクラスで見られたことから、音楽活動の中に速度の速い動きを取り入れることは、子どもたちにとって遊びの刺激となり、興味・関心を引き出す材料となることがわかった。

（３）音楽を聴いて動物を想像し、真似する活動について

第２回目の指導では、音楽から動物を想像し、その鳴き声を真似するという活動を行った。方法は、一つの旋律の高さ（音域）と速度を変化させ、速度からは動物の歩く様子、音の高さからは体の大きさを表現し、それを子どもたちに感じてもらうこととした。動物は、ネズミ、犬、ゴリラ、ゾウの４種類とし、はじめに用意したイラストを子どもたちに示しながらそれぞれの動物を表現した音楽を聴かせ、その動物の真似をするところから活動をスタートさせた。それに加えてＢ幼稚園では、慣れてきたころを見計らい、音楽だけを演奏し、クイズ形式で「何の動物の音楽か」と子どもたちに出題し、子どもたちがそれに解答する形でその動物の真似をすることも行った。

指導者（筆者）の主観としては、この活動は３歳児にとっては難易度が高すぎる活動であったと考えている。イラストを見せ、何の動物について扱っているのかを明確にしているあいだは、子どもたちはある程度指示通りに動いていた。しかし、クイズ形式での活動となると、子どもたちは判断に迷い、周りの子どもたちに合わせようとキョロキョロと周囲をうかがう様子が見られた。そして、筆者の「お鼻の長い動物だよ」などというヒントによって、ようやく動き出すという状況で、スムーズに活動できた

とは言い難かった。しかしその一方で、「ネズミとゾウを表現した音楽は理解できていたのではないか」という意見が、A幼稚園、B幼稚園双方の参観保育者から寄せられた。これらの意見は、筆者の主観とは異なるものであったので、今後、動物をネズミとゾウだけにしぼる、指導者が先に動物の名前を言って演奏するのではなく、活動に先立って「これ（この音楽）は何の動物さんに聞こえる？」などの質問をするなどして、実際に子どもたちがどの程度音や音楽から動物を連想させることができるのかを検証課題としたい。

この活動について評価できる点としては、「子どもたちは楽しんでいた」という意見が実施した２つの園双方から寄せられたことである。仮に子どもたちにとって今回の活動が難解であったとしても、子どもたちの音楽への興味・関心を引き出す一助になったと考える。そして、活動を適切な難易度に調整しながら繰り返していけば、３歳児でも音の高低や速度を聴きわけたり、そこから動物などを連想し、表現したりすることが可能となっていくのではないかと考える。

２．３歳児は裏声（ファルセット）が出せるのか

３歳児は裏声（ファルセット）を出せるのかについては、十分可能であると結論づける。

第１回目、第２回目の指導を通じて、活動に動物の鳴き真似を多く取り入れた。これは先述の通り、普段意識して使うことがない裏声（ファルセット）を、遊びを通じて子どもたちが体感するために有効な手段だと考えたためである。

今回の指導では、第２回目の終わりまでに、A幼稚園では、指導者（筆者）の体感で８割程度、B幼稚園ではほぼ全員が裏声（ファルセット）を出すことができていた。なお、A幼稚園とB幼稚園で差が出たのは、A幼稚園では学年全員（約 60 名）を集めた一斉指導であったため、指導中に子どもたちがはしゃいでしまうと、指導者の声が聞こえなかったり、次の展開にスムーズに移れなくなるなど、指導が十分に行き届かない場面があったためと考えている。

動物の中では、特にゾウの鳴き真似は効果が高かった。子どもたちは無理なく、そしてとても柔らかな裏声が出せており、今後の歌唱指導への期待が持てる結果となった。ゾウの鳴き声の真似が効果的であったのは、ゾウの「パオーン」という鳴き声が長く伸びること、さらに伸びる部分が「オ」の母音で、口が縦に開きやすく、自然と共鳴（響き）を持った声になるからだと考える。

第２回目の指導の後、B幼稚園の保育者から、「子どもたちが第２回目の指導が終わった後も、動物の鳴き真似を楽しそうに続けていた」という報告があり、子どもたちが楽しみながら活動に取り組めたことが確認できた。よって、今回の指導を通じて、３歳児も無理なく裏声（ファルセット）を出せることを確認できたと同時に、「動物の鳴き真似をする」という活動を３歳児への歌唱指導に用いることが十分に可能であることがあわせて確認できた。

３．３歳児はファルセット（裏声）で歌唱できるのか

３歳児は、裏声（ファルセット）で歌唱することは不可能ではないが、裏声（ファルセット）を出す遊びを十分に行った後に、時間をかけて歌唱へ移行する必要があると考える。

今回の活動では、前述の通り、子どもたちに裏声（ファルセット）で鳴き真似をさせることには成功した。よって、B幼稚園の活動で、第２回目の指導の最後に、わらべ歌「夕焼け小焼け」（譜例１）の歌唱を試みた（歌唱は譜例１の１オクターブ上で実施）。また、３歳児であることを考慮し、歌唱するのは最初の２小節（ゆうやけこやけ）のみとした。

指導を実施する前は、子どもたちに「ゾウさんの鳴き声で歌ってみよう」と言えば、３分の１程度の子どもたちが裏声で歌唱できるのではないかと予想していた。しかしながら、実際には、子どもたちは困惑したように押し黙ってしまい、裏声でも歌唱はもちろん、実声での歌声も聞こえず、沈黙が流れた。B幼稚園で最後に指導したクラスで、かすかに裏声での歌声が聞こえたが、これは稀有な例であった。

これは、わずか２小節といえども、３歳児に突然知らない歌を歌わせようとしたことが原因である。しかし、同時に子どもたちが困惑した様子から、裏声を出すことと歌うことを結びつけ、それらを同時に行うことが、３歳児にとってはかなり難しいことであるという認識を強くした。よって、仮に３歳児に裏声で歌唱を行わせる場合には、事前に歌を十分に反復練習し、一方で動物の鳴き真似などを通じて裏声を出す遊びも十分重ね、どちらもある程度できる状態になって初めて可能になると考える。

しかしながら、「３歳児に裏声で歌唱させる必要があるのか」については、慎重に考える必要がある。水崎は、３歳児はまだ保育者の範唱や伴奏に合わせることは難しく、自分の好きな高さで歌っていると述べ、また、次々に新しい曲を教えていくのは避けるべきだと指摘している[3)]。このことからも読み取れるように、３歳児の歌唱は、いわば歌の入り口であり、そこに歌唱技術を持ち込むと、歌唱そのものを窮屈に感じるようになってしまう可能性もある。子どもたちにとって最も大切なことは、「歌うことが楽しい」ことである。ゆえに、まずは何にもとらわれずに思い切り歌う楽しさを存分に味わい、歌を愛好する心情を育むことを優先する必要があるだろう。そしてそれと並行して、「裏声で歌う」ことが３歳児にとって「楽しいこと」となるように、活動の進め方・あり方を検討していきたい。

Ⅳ．まとめ

今回の指導を通じて実感できたことは、「子どもの実態と実情を知る」ことの大切さである。今回対象とした３歳児に限らず、指導においては、現在の子どもたちの力（できること、できないこと）を正確に把握し、年齢や発達に見合った適切な課題を提示できなければならない。そして、提示した課題を通じて、子どもたちがどのような力を身につけ、成長していくのかの見通しを持てなければ、子どもたちが楽しく、満足する活動を展開することは難しいだろう。

子どもたちの実態や実情を知るためには、何よりも共に過ごすことである。しかし、現実には、子どもたちとは、指導時にしか顔を合わせることができない。よって、今後の研究においては、子どもの実態と実情の把握をいかに行うかが、大きな課題となるだろう。その意味では、現場の保育者との連携が重要な鍵となると考える。

保育者との連携をあり方についても常に検討を重ね、より実用的な歌唱指導法の構築に向けて努力していきたい。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP19K02665（基盤研究 C）の助成を受け、実施している。

Ⅴ．備考：主な参観保育者のリフレクション

１．リズムへの反応について

- ３歳児では、身体の部位の名前と場所が一致していない子もいるのではないか（１）
- 音やリズムに反応できていた子どももいれば、先生や友達の真似をして反応している子どももいた（１）
- 子どもたちは身体の部位を触ったり、歩いたり活動自体は楽しんでいた。しかし、活動の説明を理解することが難しく、正解がわかっていない子も多かったと感じる（１）
- 保育者の言葉、指示、動きを真似て楽しむことはできたが、言葉よりも動作に反応して、途中理解できていない様子の子どもが多かった。しかし、活動自体は興味を持って取り組んでいた（１）

２．行進とストップ・アンド・ゴーについて

- 子どもたちは、円になって体操はしたことがあったが、円になって同じ方向に歩くという活動は今までやったことがなかった。しかし、子どもたちはとても楽しそうに歩いていて、遊びの中で音楽を使うと、こんなに早く歩けるようになるんだと思った（１）

３．動物を聴き分ける活動について

- 音で動物を聴き分ける活動は、難しかった。しかし、ネズミ（高い音で速度の速い音楽）と、ゾウ（低く速度の遅い音楽）は聴き分けることができていたように思う（２）
- 子どもたちは音楽を聴き分ける活動に楽しんで参加していたが、内容をしっかり理解しきれない面もあった（２）
- ピアノ（高低）に合わせて子どもは何の動物かわかっていた（２）
- 動物のカードを見て、子どもなりに声（鳴き声の真似）を出していた（２）
- 子どもたちは、動物の鳴きまねをしながら、音楽に合わせる活動は楽しめていた。ゾウ、ネズミの音は理解できたが、犬、ゴリラの音は保育者でも消去法でわかったくらいであった（２）
- ゾウの鳴きまねをして楽しむ姿があった（２）

- ３歳児は、３つのことを覚えられれば褒めなければいけないので、4 種類の動物の聴き分けは難しい（２）
- 音の違い自体は聴き分けられているが、それが何の動物かわかるまでは難しい（２）
- 音の高さの違いに気が付けていたのでよかった（２）
- 幼児の動物のイメージは体の動きになってしまう。劇の練習ならそれでよいが、音楽の中では声が出にくくなってしまうのではないか？例えばゾウの声なら「手を振って鼻に見立て、振りの幅に応じて声を大きくしたり高くする」などの方法はどうか（２）

４．裏声（ファルセット）について

- ゴリラの真似をしながらゾウの鳴き声を真似する“ゴリラゾウ”では、きれいな裏声が出ていた。保育者（大人）には想像できない“ゴリラゾウ”を子どもなりにイメージして声を出していたようで、それがとても新鮮だった（２）

５．裏声（ファルセット）での歌唱について

- 保育者は、ゾウの鳴き真似から歌唱に移ることは想像できたが、子どもたちにはかなり難しかった（２）
- あせって「夕焼け小焼け」の歌唱に移るのではなく、もっとゾウの鳴き真似をたくさんして、きれいな裏声を実感させたほうがよかったのではないか（２）

６．その他

- 導入が子どもたちが知っている手遊び歌だったため、子どもたちが一気に集中できた（１）
- ２回目の活動で、前回の復習があったのはよかった（２）

※（ ）の数字の（１）は第１回目の指導の後に寄せられたもの、（２）は第２回目の指導の後に寄せられたリフレクション

注・文献

１）長川慶（2017）：幼児の歌唱活動における問題点と指導のあり方 －新しい歌唱指導法の開発にむけての基礎研究－，保育文化研究第 5 号，85-98.

２）長川慶（2013）：児童に対する発声指導についての一考察 －基本となる発声についての考え方とその指導法 －，新潟中央短期大学紀要 暁星論叢 63 号，79-108.

３）吉富匠修・三村真弓 編著（2012）:「幼児の音楽教育法 美しい歌声をめざして」，ふくろう出版，岡山，19.